

## F・ベルヴァルトの生涯における諸業績と音楽活動 (1) : 作曲家としての自立への道程

著者名(日)	本間 晴樹
雑誌名	研究紀要
巻	25
ページ	23-39
発行年	2001-12-20
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1300/00000802/">http://id.nii.ac.jp/1300/00000802/</a>



## F・ベルヴァルトの生涯における諸業績と音楽活動（1）

——作曲家としての自立への道程——

本 間 晴 樹

### 1. 序

19世紀のスウェーデンの音楽家・作曲家として、現在最も評価が高いのは、衆目の一致する所、まずフランツ・ベルヴァルト<sup>(1)</sup> (Franz Adolph Berwald : 1796—1868) であろう。彼の作った4曲の交響曲、多数の室内楽曲は、多くの機会に演奏されまた録音され、スウェーデンだけでなく世界各国で親しまれている。しかし、生前及び19世紀中における彼の評価は、決して高いとも、安定しているとも言えるものではなかった。勿論、彼の音楽が全く認められなかった訳ではなく、彼の作品に対する支持者は多かったし、生涯において、彼が経済的に窮迫したことは余りなかった。その一方、彼が音楽界での成功を賭けたオペラ作品は、上演の機会を殆ど得られず、得てもまるで評価されず、その後久しく埋もれた作品になってしまった。また、32才の時に宮廷楽団を退いて以来、彼は音楽関係の定職を求め続けたが、ついに得ることができず、音楽アカデミーにさえ、死の前年ようやく入れたのであった。要するに、当時のプロの楽壇からは、彼は正統的でない存在、いわばディレッタントと見なされていたのである。彼が1830年代にベルリンで整形医学研究所を開き、また1850年代には北部スウェーデンでガラス工場を経営し、どちらでもそこそこの成功を収めたことは、ますます彼の専門性を疑わせ、片手間に音楽をやっているという印象を更に深めることになった。しかし、彼が音楽以上に献身した対象はなく、彼は音楽家であろうとすることをやめなかった。ただ、音楽に打ち込みながらも、彼は専門領域に捕われず、様々なことに関心を抱き、取り組む意欲を持った、その意味では確かにディレッタントであった。しかも、一見音楽から遠いかに見える、多様な事柄への関わりは、決して単に音楽を妨げるものではなく、恐らく彼の音楽活動に、他の方法では得られない広がり、深さを与えるものであった。

本稿では、ベルヴァルトの生涯及び芸術の、前半部分について解明するに当たって、特に彼の音楽に限定されない、社会的・文化的等様々な領域での活動、またそうした方面における対人関係等に焦点を当て、彼の音楽をより広い視野から考察し、それを当時のスウェーデン社会の中に位置付けることを目的とする。

## 2. 家系と家庭

ベルヴァルトの先祖は、元は北ドイツで代々音楽を生業としてきた一族であった。遡れる範囲では、フランツの高祖父ヨハン・ダニエル（1638?—1691）が、ブランデンブルク選帝侯領ノイマルクの町ケーニヒスベルク（現ポーランド西部ホイナ Chojna）の、町音楽師（Kunstpfeifer）であったことが判っている。その息子ヨハン・ゴットフリート（1679—1732）も、同じ町で同じ地位に就いたが、その息子ヨハン・フリードリヒ（1711—1789）は、フルート奏者としてコペンハーゲン、ホルシュタイン等で活動し、後にメクレンブルク・シュヴェーリン公国の宮廷楽団に加わった。彼は4回の結婚により25人以上の子供を得たが、その中で幼時の死を免れたのは11人で、そのうち5人が音楽を職業に選んでいる。彼の最初の結婚による子供で、成長した中の2番目が、フランツの父クリスチャン・フリードリヒ・ゲオルク（通称クリスチャン：1740—1825）であった。彼はヴァイオリン奏者としてプロイセンの宮廷楽団で勤めた後、1772年スウェーデンに渡り、国王グスタフ3世の弟セーデルマンランド公カール（後の国王カール13世：在位1809—18）に見出され、翌年宮廷楽団に採用された。彼の弟ゲオルク・ヨハン・アブラハム（1758—1825）も、1782年スウェーデンの宮廷楽団に、初めはファゴット奏者、後にヴァイオリン奏者として加わっている。クリスチャンは、ドイツで結婚した妻ヘドヴィクをスウェーデンに伴って来たが、彼女は死産1人を別にして、2男1女の子供を残し、1787年に亡くなった。この子供達の中には、音楽に特に関わった者はいない<sup>(2)</sup>。1789年クリスチャンは、醸造業者の娘アグネッタ・ブルーノと結婚し、彼女との間には2男3女の子供ができたが、そのうちの3番目で、男としては1番目がフランツ・アドルフであった。もう1人の男の子クリスチャン・アウグスト（通称アウグスト：1798—1869）も、後年ヴァイオリン奏者として名をなすことになるが、3人の姉妹達も、それぞれ声楽、ピアノ等においてかなりの熟達を遂げている<sup>(3)</sup>。

フランツが生まれる前後の数年間は、フランス革命戦争に続くナポレオン戦争の影響を受け、スウェーデンでも内外共に多難で、動揺が絶えなかった時期であった。音楽を含む芸術の愛好者かつ保護者であった国王グスタフ3世は、強引な独裁政治への反発から、1792年3月、オペラ座での仮面舞踏会の際に狙撃され、殺害された<sup>(4)</sup>。その息子のグスタフ4世は、4年間の摂政政治の後、1796年から統治を開始したが、グスタフ3世の時代に劣らぬ専制政治が継続されることになった。ただ、グスタフ4世は父親と違って、芸術・学問には大して関心がなかった。1806年グスタフ4世は、グスタフ3世暗殺の忌まわしい思い出の場所として、オペラ座を閉鎖させ、翌年には取り壊しを命じた。尤も、当時ナポレオンとの戦争に突入していたスウェーデン政府には、取り壊しの費用が捻出できず、オペラ座の建物は無事に存続した。しかし、当時の宮廷楽団にとって、最も主要な仕事はオペラ座での演奏であり、その必要がなくなった為に宮廷楽団は著しく縮小され、クリスチャンは1806年限りで解雇された。その後の彼

は、国王に願って年金を確保はしたが、主に個人教授と写譜によって収入を得ることになり、子供の多い家庭で、生活は楽ではなくなった。

フランツの幼・少年時代については、詳しいことはなお不明であるが、学校にはごく短期間通っただけで、音楽を含めた初等教育は、専ら家庭で受けたらしい。これは家計が苦しかった為とされているが、フランツ自身が学校生活に耐えられなくて飛び出したことを示唆するエピソードもある<sup>(5)</sup>。後年、彼は旺盛な読書と多彩な交友関係を通して、多くの領域において、広範な知識を獲得した。しかし、彼の学識は広くはあってもどの分野でも深くなかったことは、既に指摘されている。彼は種々の事柄について意見を表明し、ジャーナリズム活動にも従事したが、彼の思想や芸術観を後世に伝えるような著述を残してはいない。手紙も量は多くなく、中身は概して断片的で、彼の人物像を浮き上がらせる資料としては頼りない。これを直ちに、彼の基礎的な教育、或いはその欠落のせいにするのはなお早計かも知れないが、それと無関係とも言い難い。

伝えられる所では、彼はヴァイオリンのレッスンを、5才の時から父の元で始めた。初めての公開の演奏は、父が失職した年である1806年の6月ウプサラにおいて、彼が10才になる直前のことであった。この年の9月にはヴェステロースにおいて、12月にはストックホルムの貴族会館ホールで、彼のデビューコンサートが行われている。少年演奏家が早々と腕前を披露する機会を与えられるのは、当時よくあったことで、彼がこれでプロの演奏家の一員と認められたとは考えにくい。

### 3. 演奏家として

1809年、フランツの母のアグネッタが亡くなったが、この年にはベルヴァルト家にとってもスウェーデンにとっても、重大な変化が訪れた。3月に軍隊の蜂起が起こって国王グスタフ4世が失脚、廃位され、6月には新憲法が制定され、グスタフ4世の叔父のセーデルマンランド公カールが国王に即位し、カール13世となった。この後スウェーデンは専制政治から脱皮し、立憲政治への道を進むことになる<sup>(6)</sup>。社会的・文化的にも生じた変化は色々あったが、差し当たりオペラ座の閉鎖が解かれ、宮廷楽団の再建も日程に上ることになった。ベルヴァルト一家にとって直接的に大きな影響を与えたのは、スイス人音楽家エドゥアール・デュピュイ (J. B. E. Du Puy<sup>(7)</sup>: 1770? - 1822) のスウェーデン復帰であった。デュピュイは元々ヴァイオリン奏者で、なおかつ声楽家・作曲家・指揮者としても手腕を発揮し、1793年からスウェーデンの宮廷楽団に属していたが、政治的急進性がグスタフ4世の不興を買い、1799年にスウェーデンを去り、その後主にデンマークで活躍していた。1809年スキャンダルのためにデンマークにいられなくなった彼は<sup>(8)</sup>、1810年政治状況の変わったスウェーデンに戻り、宮廷や音楽界から暖かく迎えられた。恐らく父を通じてデュピュイと接触することができたフランツは、1811年3月、ストックホルムでのコンサートで、デュピュイ作曲のヴァイオリン協奏曲のソロを演奏

し、次いでデュピュイの教授を受けるようになっている。1812年9月、宮廷楽団の楽長にデュピュイが就任すると、その推輓により翌10月にフランツは、16才の若さで宮廷楽団のヴァイオリン奏者に採用された。その後も、ほぼ10年にわたり、フランツにとってデュピュイは、ヴァイオリンの師であるだけでなく、様々な形で彼を支え、力になった存在であった。

1812年に再開に漕ぎ着けたストックホルム・オペラ座は、宮廷楽団の主要な活動の場として復活し、フランツにとっては、生業と修練の両方の場となった。デュピュイの指導下で、当時のオペラ座が取り上げた作品には、グレトリ、メユール、ボイエルデュ等、フランス系のものが多かったが、またヴェーバー、ケルビーニ、モーツァルト等の作品も徐々にふえ、フランツが深くモーツァルトに傾倒するきっかけとなった<sup>9)</sup>。1815年、弟のアウグストも、宮廷楽団にヴァイオリン奏者として加わった。1816年、フランツとアウグストは、デュピュイの作った2台のヴァイオリンの為の協奏曲をコンサートで演奏している。

ヴァイオリン奏者としての仕事を続ける一方で、いつの頃からかは判然としないが、恐らく20才になる以前から、フランツは作曲の勉強に取り組み始め、更に作曲家を目指すに至っている。彼がどのようにして作曲を学んだのかは、多分デュピュイの協力と指導があったらしいという他は、詳しいことはわからないし、その動機も謎である。ただ、彼が演奏家としての将来に限界を感じたことは、十分可能性がある。例えば、彼より弟の方が演奏家としては高い評価を得るようになっていったし、加えて、従兄のヨハン・フレドリク・ベルヴァルト（1787—1861）の存在も、彼にとって越え難い壁として意識されていたと思える節がある。ヨハン・フレドリクは、フランツの叔父ゲオルク・ヨハン・アブラハムの息子で、ルイス・シュポーアからヴァイオリンを学び、6才の頃からドイツ・オーストリア・ロシア等を演奏旅行して回って天才少年と騒がれ、特にロシアでは非常な人気を博して一時定住し、1808—12年ペテルブルクの帝室管弦楽団のソリストを勤めた。1812年スウェーデンに戻ってからも評価は高く、1814年宮廷楽団に入ると、前任であるフランツを凌ぐ存在になっている。なお、ヨハン・フレドリクとフランツの間には、極めて冷たい、陰湿な対立関係があったとする見方もあるが、実際には、プロとしてのライバル意識はあったにせよ、同業者としての協力や、普通の親戚付き合いができないような関係であったとは考えにくい。

#### 4. 作曲家を目指して

フランツは日記をつけなかったし、自身の音楽活動に関する詳しい記録も残さなかった。また、彼の作品には製作開始から完成まで、或いは初演までに長期間を要しているものがある。その為、彼の作曲活動を年代順に整理するのはやや困難がある。ごく初期の作品では、1809年母親の追悼の為に作ったピアノ曲が残されているが、公開演奏を予期して作った曲としては、1816年に完成した「ヴァイオリンとオーケストラの為の主題と変奏・変口長調」が、恐らく最初のものである。この頃から本格的に作曲に取り組み始めた彼は、1817—18年の時期

に、管弦楽曲、歌曲、ピアノ曲等を次々に書き上げている。1818年1月には、宮廷楽団の共演により、証券取引所（Börsen）のホールで、自作の演奏会を開くことができた。演目は「2台のヴァイオリンの為の協奏曲」と「七重奏曲」（2曲とも現存せず）で、ソロは今回も彼と弟とで勤めた。このコンサートには、オペラ座総監督で、軍人で政治家でもあるグスタフ・レーヴェンヒェルム伯爵が聴きに來て、好意的な反応を示してくれた。フランツは、レーヴェンヒェルムの力に頼ってウィーンへの留学を実現しようとしたらしいが、程なくレーヴェンヒェルムがパリ駐在公使となって赴任していった為、この計画は実現しなかった。

作曲家に転じる意志を次第に強めたフランツは、1818年、自作の発表の場として雑誌を発行することを企て、9月には新聞に予約募集の広告を掲載した<sup>(10)</sup>。また、作曲と雑誌編集に専念する為、10月限りで宮廷楽団を退職した。彼の雑誌『ムシカリスク・シュルナール（*Musikalisk—journal*）』は、1818年のクリスマスに創刊との予定は少し狂ったが、1819年1月に発行に漕ぎ着けた。雑誌とは言っても記事の為ではなく、専ら新作の楽譜を載せる為のもので、第1号には歌曲2点、ピアノ曲4点、それに1816年作の「主題と変奏・変ロ長調」が、ピアノ譜で掲載されていた。第2号以後もほぼ同じように、但し他人の新作も混じえながら、毎月1号のペースで発行され、予定された最終号である第6号まで、無事に刊行することができた。ひとまず計画が破綻せずに済んだことに意を強くしたフランツは、雑誌を遠からず復刊させることを予告している。その一方、1819年初頭に彼はライプチヒのペータース社に、自作の「弦楽四重奏曲ト短調」と「弦楽四重奏曲変ロ長調」（これは現存せず）の2点を出版することを打診しているが、返事は得られなかったようである。

雑誌の発行が終わった後、1819年の夏、フランツは弟アウグストを伴って、フィンランド及びロシアへの演奏旅行を行い、トゥルク、ヘルシンキ、ヴィープリ、ペテルブルクで、演奏会を催した。尤も、演奏家として主にソロを引き受け、妙技を披露したのは弟の方であり、フランツにとっては、モーツァルトやヴィオッティの作品に混ぜて自分の作品を紹介すること、それに国際音楽ジャーナリズムの一方の中心であるペテルブルクで、雑誌発行の為の情報と知識を得ることの方が目的であった。

帰国後、フランツは早速雑誌を再刊する準備に入ったが、今回は国際的な販路獲得を目指して、誌名を『ジュルナール・ド・ミュージク（*Journal de Musique*）』とフランス語に変え、中の文章も専らフランス語で書くことにした。しかし、これが裏目に出て、国内での反響は前回よりも乏しく、国外でも殆ど注目は得られなかった。発刊予定がまたずれ込んで、1819年11月に第1号と第2号を同時発行し、1820年4月に第4号を出すことができたが、以後の号はついに発行されずに終わった。作曲のみで暮らしていくことの困難を悟った彼は、1820年6月宮廷楽団に復職している。

1821年3月、証券取引所ホールでの宮廷楽団のコンサートにおいて、フランツは自作の「ピアノと木管の為の四重奏曲変ホ長調」、「ヴァイオリン協奏曲嬰ハ短調」、「交響曲イ長調」の一部（この曲は結局未完成）を演奏させることができた。ヴァイオリンのソロは、今度もアウグ

ストであった。翌1822年1月にも、同じホールで宮廷楽団により、フランツの「2台のヴァイオリンによる協奏曲」と、前年に作られた「前国王カール13世の銅像の除幕式の為のカンタータ」(後述)の演奏が行われている。ヴァイオリンのソロを弾いたのは、今度も弟アウグストと、それに姉のカロリーネ(1794年生)であった。なお、従来は(そしてこれ以後も)批評において、概して当たり障りのない褒め言葉しか書かれたことのない彼が、この時は『ニヤ・アルグス(Nya Argus)』紙において「旋律性の欠如」や「頻繁な転調による旋律の破壊」について、かなり痛烈な批判を受け、彼もこれに真剣に反論している<sup>(11)</sup>。幸か不幸か、彼にはこのような機会は滅多に来なかった。

作曲家として徐々に評価を得てはいたものの、なお専門的訓練の不足と、演奏家を兼ねていることの労苦に悩んだフランツは、1823年2月、外国で作曲を学ぶ為の補助金の申請を、国王宛てに提出したが、余り例のない請願であった為もあり、大して考慮を受けることなく却下されてしまった。更にこの年の4月26日、楽長のデュピュイが亡くなったことは、彼には大打撃であった。デュピュイは単にヴァイオリンと作曲の師として彼を導いただけでなく、宮廷楽団の中での庇護者として、多分に衝動的で楽観的すぎるフランツの行動を庇い、彼にチャンスを与え続けた存在であったからである。デュピュイの没後、仮にその任務を引き継いだのはフランツの従兄のヨハン・フレドリクで、彼は翌年には正式に楽長の後任となる。ヨハン・フレドリクがフランツに対し、特に冷淡であったり苛酷であったと言う証拠はないが、年上ではあった後も後輩である、かつ一族の中で最も英才の名の高かった従兄が上司になると言うことは、フランツにとって嬉しいこととは言えなかった。1823年7月、フランツは突然、直接の理由は不明だが多分作曲の為、再度宮廷楽団を辞している。翌1824年4月にはまた復職しているが、ヴァイオリンではなくヴィオラ奏者としてであった。フランツは以前から、例えば弟と共演するような場合は自らヴィオラを引き受けることがあり、この人事は、特に彼にとって屈辱的、懲罰的であったとは思われない。ただ、いずれにせよ宮廷楽団での仕事が、生活の為とはいえ、彼にとって更に重荷になっていったことは確かなようである。この1824年秋、音楽アカデミーのオルガンと声楽の教員に空席ができた際、フランツは両方に応募してみたが、彼はどちらについても専門家ではないということで、撥ねられてしまった。翌1825年2月、父クリスチャンが84才で亡くなった。高齢とは言え、フランツにとっては痛手であった。特に、未だに結婚できない姉妹達の生活を支える責任は、専ら彼にかかって来たのである。

## 5. 社会・文化との関わり

前述の通り、学校での勉強には殆ど縁のなかったフランツではあるが、様々な知識・教養、とりわけ同時代の文化事象や社会問題について、彼はかなり旺盛な関心を持っていた。その関心に応え、彼の知識欲を満たした方法については、彼に関わる他の事柄と同じく、詳しくはわからない。しかし、宮廷楽団員、作曲家、それにレッスン教師としての立場から、彼が様々な

社会に属する様々な人々と接することができたことが、彼に多くの機会をもたらしたことは確かである。

その意味で重要な存在として、ボギスラウ・フォン・シュヴェーリン伯爵 (Bogislaw von Schwerin : 1764—1834) がいる。シュヴェーリン家は北ドイツ系の貴族の名門で、18世紀には数々の軍人・高級官僚を出していた。ボギスラウも初めは軍人を目指していたが、ドイツ留学中に志望を変更して聖職者になり、1788年ストックホルムの西北のサラ (Sala) の町で教区牧師の地位を得てからは、その職にほぼ一生従事することになった。その一方で、彼は当時のロマン主義的文化運動にも関心を寄せ、文芸雑誌の発行に力を貸し、自らも筆を執り、また国内及び国外の文学・芸術・思想等に関する多量の書籍の収集を行った。一方で彼は政治との関わりも持ち、1812年以後は議会の聖職者部会の指導的存在として、政治問題、特に経済危機や財政難の解決に積極的に関わり、1823—33年には国立銀行理事長を勤めている。このシュヴェーリンの元に、1810年代の末、フランツが親しく出入りしていたのは、細かい経緯は不明だが、シュヴェーリンが音楽、とりわけヴァイオリンを愛好していたことと無関係ではあるまい。フランツは、サラの牧師館で、その豊富な蔵書を借読する機会を得、当時のロマン主義、民族主義の潮流について、大いに啓発された。また、後になってフランツが、経済問題、社会問題について発言するようになる下地も、シュヴェーリンやその周囲の人々との交流によって得られた可能性が高い。

同様に大きな影響をフランツに与えた人々の中に、詩人ペール・ヘンリク・リング (Pehr Henrik Ling : 1776—1839) がいる。彼は、ナポレオン戦争前後の時期の民族主義高揚の風潮に乗って、民族的・愛国的な作品を多数発表し、またスウェーデン特有の復古的民族主義である「イエート主義 (göticism)<sup>(12)</sup>」の、強力な推進者となった。更に、一民族の力の源泉は個々人の健康と体力にあるとの認識から、ドイツのF・ヤーンと同様にスポーツの普及に努め、学校・軍隊・医療の為の体操を考案し、いわゆるスウェーデン体操を創始している<sup>(13)</sup>。元々南スウェーデンやデンマークで活動していた彼は、1813年陸軍士官学校の体育教官としてストックホルムに移り、そこに中央体育研究所を創設する等の功績を残し、後世には文学者としてより体育の指導者として知られている。恐らく民族主義への共感からリングの作品に接したフランツは、その体育方面の業績にも興味を抱き、特に医療体操の知識を熱心に習得した。後述のように、これはフランツの人生において、かなりの意味を持つことになる。

但し、フランツがリングと直接知り合い、交際したという痕跡は確認できないし、リングの側がフランツのことを知っていたかどうかも疑問である。仮に両者の間に接触がなかった場合、リングの仕事をフランツに紹介した人物として、可能性のあるのがガブリエル・ブランティング (Lars Gabriel Branting : 1799—1881) である<sup>(14)</sup>。彼はリングの弟子で体操教師であり、スポーツ普及運動において協力者でもあった。しかしリングが軍隊式体操の方にやや力を注いだのに対し、ブランティングはむしろ医療体操の方を重視し、普及に努めた。またブランティングは、音楽の愛好者でホルンの演奏を得意とし、アマチュアながら音楽アカデミーの会



員にも選ばれている。やはり直接の証拠はないが、ブランティンがフランツと接触し、医療体操の手ほどきをしたという蓋然性は十分ある。

## 6. 王室・宮廷との関わり

デュピュイの没後、演奏家としての将来にほぼ見極めをつけ、しかし作曲家としての道が容易に開けてこないフランツにとって、希望の持てる材料は、王室、それも王太子オスカル(1799—1859：後に国王オスカル1世：在位1844—59)との接触が生まれたことだった。オスカルはフランスの将軍J・B・ベルナドット(1763—1844：後にスウェーデン国王カール14世：在位1818—44)の息子としてパリで生まれた。1809年の革命の後、スウェーデン王位継承者を選ぶ問題が生じ、最終的に1810年、ベルナドットが次期国王に選ばれると、オスカルも父と共に招かれてスウェーデンに移り住んだのであった。1818年国王カール13世が没して、ベルナドットがカール14世として即位すると、オスカルは王太子となった。生涯ついにスウェーデン語を習得できず、スウェーデンに対する違和感とスウェーデン国民に対する不信を、一生持ち続けた父カール14世と違って、オスカルは直ちにスウェーデン語をマスターし、北欧風の生き方、気質を身につけることができた。保守的で疑い深い父と異なり、オスカルは進歩的な思想に共鳴し、明るい性格で国民の間に人気を博した。音楽が好きな所は父と共通していたが、オスカルの方が深く音楽に打ち込み、ピアノと声楽を学び、少しは作曲もできた。1818年にカール13世が亡くなった時には、葬送行進曲を作り、これは公式行事で演奏されている。音楽アカデミーや「ハーモニー協会 (Harmoniska sällskapet)<sup>(15)</sup>」の主要メンバーとして、オスカルは当時まだスウェーデンに馴染みの薄かった、マイヤーベア、ロッシーニ、ウェーバー等の作品の演奏機会を設けて広く紹介し、また有望な若い音楽家を援助して、才能を延ばす機会を与えもした。彼の援助を受けた者の中で、最も著名なのは、エドゥアルト・ブレントレル (Eduard Brendler：1800—31) であろう。彼の父ヨハン・ブレントレル (1773—1807) は、ドイツ生まれのフルート奏者で、スウェーデンの宮廷楽団に属していた。父の死後、エドゥアルトはフルートを学びながら、ゴットランド島で商人として身を立てるべく働いていたが、1823年ストックホルムに戻り、フルート奏者としての才能を認められ、ハーモニー協会に加えられた。その後、オスカルの援助を得て、作曲活動に転じた彼は、1828年以後声楽曲、劇音楽等を次々に発表する。彼が1831年、オペラ「リノ、または遍歴の騎士 (Ryno eller den vandrande riddaren)」を手掛けながら、未完成のまま没すると、オスカルはこれを自らの手で完成させ、1834年宮廷楽長ヨハン・フレドリク・ベルヴァルトの指揮により、オペラ座で初演させている<sup>(16)</sup>。

フランツが王太子オスカルと初めて関わりを持った時期は、明らかでないが、形に残っているものとしては、1819年フランツが、スコーネでの大演習に臨むオスカルの為に、「分列行進曲 (Revue marsch)」を作って献呈したのが、最初と見られる。仲介したのがデュピュイか、

それとも他の有力者の知人かはわからない。その後、1821年ストックホルムの王宮北の王立庭園（Kungsträdgården）に、3年前に亡くなったカール13世の銅像が建てられることになった時、その除幕式の為のカンタータの作曲が、フランツに依頼され、彼の手で書き上げられた。この曲は、どういう訳か除幕式当日には演奏されなかったが、前述の通り、翌年の証券取引所でのコンサートで初演されている。続いて、1823年オスカルは、ドイツのロイヒテンベルク公爵令嬢ヨゼフィーネ<sup>(17)</sup>と結婚することになり、その祝典用の曲の製作もフランツに依頼されることになった。フランツは、これを5人の独唱者とオーケストラによる、全7楽章のカンタータに仕上げた。しかし、1823年6月19日の結婚式にも、23日及び27日のオペラ座に置ける記念コンサートにも、この曲は披露されず、代わりに従兄ヨハン・フレドリクのオペラ「フレイアの結婚」とモーツァルトの「皇帝ティトゥスの慈悲」、それにスポンティーニの「ヴェスタの巫女」が演奏されている。フランツの曲が初演されたのは、1826年4月の証券取引所ホールでのコンサートにおいてであった。尤も、これは曲がオスカルの意に合わなかったとか、何らかの意味で不興を被ったということではなく、その後もフランツは王室を称える為の音楽を種々作り上げ、オスカルも彼に対し、充分好意を示している。ただオスカルがその政治的影響力を、必ずしもフランツの期待通り使ってくれなかったのも確かで、前述のようにフランツが1822年国外旅行の為の補助金を申請した時も、オスカルは敢えて口添えをせず、判定をアカデミーと財政当局に委ねてしまった。最期の作曲家と知れわたってしまった結果、却って援助がしにくくなったのか、或いはブレンデル等と比べて、彼はまだしもチャンスに恵まれていると思われた為だろうか。

なお、宮廷との関係において、名を逸することのできない存在として、王太子側近のベスコウ（Bernhard von Beskow 1796—1868）がいる。豪商の子に生まれ、官僚から廷臣となり、侍従（1827—）、式部官長（1832—）、侍従長（1861—）等を勤めて、オスカルと常に密接な関係にあった彼は、また作家としてロマン主義、イェート主義に深く染まり、スウェーデン・アカデミーの会員（1828—）及び書記（1832—）の立場から、宮廷と民間の文化活動を結ぶ接点でもあった。彼は同時に音楽愛好者でもあり、ブレンデルのオペラ「リノ」の原作者であった。フランツと彼の出会いについては不詳であるが、1828年の補助金申請の際には彼はフランツの為に積極的に働き掛けているし、後々までフランツの支援の為に、機会がある毎に手を尽くしている。恐らく、オスカルとの間を仲介していたとも思われる。

## 7. オペラと海外留学へ向けての苦闘

1827年夏、フランツは弟アウグストとそれにオランダ生れのピアニストのボーム（Johan van Boom：1807—72）を伴い、ノルウェーへの演奏旅行に出向き、クリスチャニア（現オスロ）とベルゲンでコンサートを催した。コンサートの演目の中でフランツの自作は、処女作の「主題と変奏・変ロ長調」と、今は失われている「ノルウェーの蒸気船『コンスティテューシ

ョン』に捧げる歌 (Flaggsång för det norska ångfartyget “Constitutionen”)」が中心であった。ボームは、オランダのフルート奏者の息子で、フンメルとモシェレスにピアノを学び、1825年にストックホルムに住み着いて以来、その才能を高く評価され、フランツとは親しく交際していた。

演奏旅行から帰ると、フランツは改めて作曲に打ち込むが、この頃彼が取り組み始めたのはオペラの作曲であり、まず選んだ題材は、「グスタフ・ヴァサ」であった。これは、16世紀のスウェーデン国王グスタフ1世の事蹟を素材にした物語で、国王グスタフ3世の素案、詩人チェルグレンの脚本、J・G・ナウマンの作曲により、1786年に初演されて以来、スウェーデンでも有数の人気オペラとして、繰り返し上演されて来たものであった。フランツは、この曲を敢えて自分の手で新しく作ろうとして、1827年から28年にかけて、特に努力を傾けていた。彼がなぜ、オペラの第1作として、既成のしかも人気の高い作品の改作を選んだのかは不明である。スウェーデンを代表する国民的オペラが、ドイツ人の作曲であることに飽き足らなかったのか、ナウマンの古典派調のオペラ・セリアをロマン派調に書き改める見通しがあったのか。或いは、この後オペラの台本を選ぶのに、何度も苦労することになる彼が、たまたま既成作品の中に最適の題材を見つただけかも知れない。

1828年が明けて早々、全3幕のうちの2幕までが完成したと公表され、2月12日証券取引所ホールにおいて、「グスタフ・ヴァサ」第1幕だけの初演が行われた。この日のコンサートでは、従兄ヨハン・フレドリクの指揮する宮廷楽団のオーケストラにより、まずボームの独奏でウェーバーのピアノ協奏曲、次に弟アウグストの独奏でシュポーアのヴァイオリン協奏曲、その後で演奏会形式による「グスタフ・ヴァサ」第1幕が演奏されたのであった。マスコミはかなり積極的にこれを取り上げ、批評は概して好意的であったが、既に評価の定着した人気作品を改変しようとする試みを非難する声も、また、彼が最終的にナウマンを凌ぐことができるかを危ぶむ声もあった。

当面の目標をオペラでの成功に定め、その為に国外での修業をいよいよ必須と感じたフランツは、1828年4月の初め、海外留学の為に補助金を再び国王宛てに申請した。申請書がアカデミーから財務当局へと回されている間に、彼は出発の準備を始め、身辺を整理し、その一環として宮廷楽団も辞めた。ところが、これが彼に不利な材料として使われてしまった。8月に、政府は彼がもはや国家の役職にない以上、補助金の対象にならないとして、申請を却下したのである。補助金が出なくても、国外で修業しようとするフランツの意志は堅かった。幸い、申請の審査の段階では口を挟まなかった王太子オスカルが、個人的な援助を提供すると保証してくれた。

出発に先立ち、フランツは更に数回のコンサートを開いた。スウェーデンにおける仕事を締め括り、また可能な限り資金を調達する為であった。まず、11月18日、ストックホルムの北東の外れにあるラドゥゴールスランド教会で、宮廷楽団の演奏とヨハン・フレドリクの指揮により、「グスタフ・ヴァサ」第2幕の中からの2曲と、国王カール14世を称える管弦楽曲「ライ

プチヒの戦い (Slaget vid Leipzig)」を発表した。この日は、王妃と王太子夫妻が聴きに來ていた。12月6日には、同じ指揮者と出演者により、証券取引所ホールで、ベートーヴェンの「エグモント序曲」「レオノーレ序曲」等と共に、フランツの新作の「七重奏曲変ロ長調」<sup>(18)</sup>等が演奏された。この日の客の入りは余り良くなかったが、王妃と王太子オスカルは今度も來てくれた。1829年4月13日には、市内の小さなサロンで、また「七重奏曲変ロ長調」の演奏が行われた。以上のコンサートによる収入の多寡は不明だが、恐らく王太子を初めとする支持者達からの援助を含め、必要な旅費を確保したフランツは1829年5月26日ストックホルムを出発し、修業地と定めたベルリンへ向かった。

## 8. ベルリンでの音楽活動

1829年6月4日、ベルリンに辿り着いたフランツは、この地での暮らしに備え、様々な人との接触に努めた。その中の一人に、父の従弟フリードリヒ・ヴィルヘルム・ベルヴァルト (1754?—1829) がいた。この人は、ベルリンに住んで薬剤師をしていたが、ベルヴァルト一族らしく音楽にも興味を持ち、フランツを非常に歓迎し、彼の為に多くの便宜を計ってくれた。フリードリヒ・ヴィルヘルムは1829年の末に亡くなるが、息子のカール・フリードリヒを初めとするこの一家は、その後もフランツのベルリン滞在中を通じ、彼にとっての大きな支えとなっている。

同様にフランツが頼りにした人として、ベルリン駐在スウェーデン公使ゲンセリク・ブランドル (Genseric Brandel: 1782—1833) がいた。アマチュアのヴァイオリン奏者であり、スウェーデンの音楽アカデミーの会員でもあった彼は、フランツに大いに期待を寄せ、職務の範囲を越えてフランツへの支援を試みた。彼はベスコウや王太子オスカルとしばしば連絡を取り、フランツの進境について好意的な報告を送っている。

現地でたまたま親しくなった人の中に、彼より少し遅れてベルリンに住み着いたスウェーデン人のヨハン・ヘンリク・ムンクテル (Johan Henrik Munktel) がいた。彼は富裕な事業家の息子で、やはりアマチュアだがピアノとヴァイオリンと声楽に秀れ、音楽アカデミー会員であった。彼はベルリンではフランツとよく食事を共にし、また一緒にビリヤードに興じることも多かった。また、ムンクテルは知人から渡された紹介状を用い、フランツをフェリックス・メンデルスゾーンと引き合わせている。一度目は1829年12月の、メンデルスゾーンがイギリス旅行から帰った直後で、二度目はその少し後のクリスマス・イヴのことであった。しかし、裕福で社交慣れしたメンデルスゾーンの振る舞いと天才を取り巻く人々の雰囲気、フランツはどうにも馴染めなかったらしい。一方のメンデルスゾーンは、フランツを傲慢で狷介、とりわけベートーヴェンを初めとする同時代の音楽家に対し、余りに僭越であると感じた様子である<sup>(19)</sup>。結局この二人には、これ以上親しくなる機会はなかった。

フランツがベルリンに來た目的は、ストックホルム以上に音楽的な環境の中に身をおき、オ

ペラ作りの技法を習得しつつ作品を完成させ、可能ならば上演の機会を把むことであった。当時のプロイセン王国の宮廷楽長であったガスパロ・スポンティーニと、フランツがどのような関係を保ったのかは判らない。しかしスポンティーニの好意により、彼はオペラ劇場に無料で入ることができたらしい。この頃のベルリンでは、ロッシーニ、ウェーバー、オーベール等のオペラが、最も盛んに上演されていた。フランツ自身の創作活動はと言うと、作りかけの「グスタフ・ヴァサ」は、もはや続きは書かれず、捨て去られることになった。代わって彼は、ベルリンに来た直後から、「セシリア (Cecilia)」というタイトルのオペラに取り組んでいる。しかしこれは捗々しく進まず、次に彼は、ベルリンで知り合って交際していた劇作家ザフィーレ (Morris Gottlieb Saphir) の戯曲「裏切り者 (Verräther)」に取り組んでみた。更に彼は、クルティウス (Carl Julius Curtius) という人物の作品「レオニーダ (Leonida)」をも取り上げ、作曲している。他に、「ドンナ・イサベラ (Donna Isabella)」というオペラも手掛けたことが判っている。1829—30年からとりかかった以上のオペラのうち、殆どは完成することなく放棄され、楽譜も多くは失われた。「レオニーダ」だけは1834年に一応完成して、ストックホルム・オペラ座に送られたが<sup>(20)</sup>、全く取り上げられずに終わっている<sup>(21)</sup>。このように、ベルリンでのオペラへの挑戦が挫折に終わった背景として、一つには望ましいリブレットが見つからないことがあった。それを察したベスコウは、1830年に自作の「トルバドゥール (Trubaduren)」という戯曲を送ってきたが、これはフランツの気に入らず、送り返されている。

オペラを初めとする仕事がうまくいかないことから、フランツは次第にベルリンに失望し、ドレスデン、ミュンヘン、或いはパリへ移りたいとの気持ちを抱くようになっていく<sup>(22)</sup>。しかし、経済的に苦しい状況の中で、それはとても不可能であった。1833年末にブランデル公使が亡くなったことは、彼には更に打撃となった。ストックホルムの有力者に対し、フランツへの経済援助要請を専ら取り次いでいたのは、ブランデルだったからである。

## 9. 整形医学研究所

不本意なことが多く、「帰国したい」と漏らしたこともあるが、結局フランツがベルリンに踏み留まったのは、音楽以外の分野で生活を支えることが可能になったからであった。かつてリング一派、特にブランディングとの交流を通して学んだ医療体操の知識により、整形外科医学の医療活動を始めたのである。即ち、肢体不自由者や肢体虚弱者の機能を、専ら体操によって回復・強化することがその活動内容であった。彼が初めてこの領域に関わったのは、1832年10月頃のことであった。脊椎がひどく曲がって手足の動きも不自由だった4才の少年の世話を引き受け、毎日少しずつの体操により、2年半の後には、少年の背を真っ直ぐにし、全身にわたって健康にすることにほぼ成功したのである。この成果を踏まえて、1835年3月、彼は本格的に整形医学に関わることにしたのである。勿論、医学を学んだことのない彼に、薬品や手術

道具を使うことは考えられず、彼が施すのは体操による治療のみであった。

1835年10月、彼の整形医学研究所が開業した。必要な資金がどこから出たのかは例によって不明だが、F・ヤーン等の先駆的活動により、スポーツや保健への関心はドイツでも広がっていたので、ベルリンで支持者を見つけることができた可能性はある。しかし類似の施設がまだ乏しかったこともあり、体操に必要な補助具や設備は、フランツ自身で作るか、彼が設計して指物師に発注することになった。研究所の運営は間もなく軌道に乗り、彼が家族に知らせているところによれば、経済的にも好調であった。ベルリンの官憲もマスコミも、この施設には好感を示した。リングの弟子の一人で、ストックホルムに1827年以来同様の研究所を開いていたオーケルマン (Nils Åkerman) 教授は、見学の為にベルリンを訪れ、フランツの施設と彼の採っている療法に、極めて高い評価を与えている。

1836—37年のある時期、フランツは入院患者の世話をする為の手伝いとして、マティルデ・ロジーナ・シェーラー (Mathilde Rosina Scherer 1817—88) という女性を雇い入れた。彼女は東プロイセンで、フランスの元軍人とポーランド女性との間に生まれ、父が後に家族を捨てた為、母の元で育てられて来た。マティルデは、フランツの研究所に入ると、様々な仕事を引き受けて彼にとって欠くべからざる存在となった。二人が愛し合い、結婚を考えるようになったのもかなり早い時期からと思われる。

研究所を始めてからも、「音楽を忘れてはいない」と周囲に告げていたフランツではあるが、さすがに1830年代後半には、纏まった作品を残してはいない。整形外科を続けながら、しかもより多くの精力を音楽に使う為、1840年頃、彼はウィーンへの移転を考慮するようになった。ベルリンでの仕事に、何らかの限界を覚えたせいとも考えられるし、家庭の不確かなマティルデとの関係が、ベルリンの親戚の間で余り歓迎されなかったことも、響いている可能性がある。1841年3月6日、フランツはマティルデを残し、一人でベルリンを発ってウィーンへと向かった。

ウィーンでは、フランツはベートーヴェンやシューベルトの旧跡を巡り歩き、また多数のオペラ劇場を訪ねた。その一方で、彼は自分の作品を上演する機会を得る為の努力もした。整形外科に関しては、彼はウィーンでは協力者を得て、共同で研究所を運営し、音楽に向ける時間を確保するつもりでいた。しかし、ウィーンでは整形医学にも医療体操にも、殆ど興味を寄せる人々がなく、この目算は外れた。5月にフランツはマティルダを呼び寄せ、ウィーンでの楽しみと苦労を共にすることになった。7月18日、二人はウィーンの教会で結婚式を上げた。

整形医学については、ウィーンで開業できる見込みはないとわかり、ベルリンの施設と諸道具は、売却されることになった。一方、ウィーン滞在中作曲の仕事は久し振りにはかどり、管弦楽曲「ユーモラスなカプリチオ (Ein humoristisches Capriccio)」「妖精の戯れ (Elfen-spiel)」「ノルウェーの山の思い出 (Erinnerung an die norwegischen Alpen)」の3曲が完成し、また、後の交響曲に利用されるフレーズが書き溜められている。加えて、劇作家プレヒトラー (Otto Prechtler) から、細かい経緯は不明だが、オペラ・セリアである「エストレ

ラ・デ・ソリア (Estrella de Soria)」のリブレットを入手することができ、早速いくつかの曲を書いている。

1842年3月6日、レドゥーテンザールで開かれた慈善コンサートで、前述の3曲が初演され、かなりの好評を博した。これで外国生活に区切りを着けたフランツは、3月15日マティルデと共にウィーンを離れ、4月6日南スウェーデンに上陸、19日に、彼としては13年振り、マティルデにとっては初めてのストックホルムに着いた。帰国の旅費は、ベルリンの研究所の処分で得られたとされている。

帰国して1箇月後の5月19日、ラドゥゴールスランド教会において、宮廷楽団の演奏、従兄ヨハン・フレドリクの指揮により、帰国記念の演奏会が開かれた。メンデルスゾーンとドニゼッティの曲の他、フランツの曲としては、ウィーンで初演された3曲の他に、「ライプチヒの戦い」と、「エストレラ・デ・ソリア」の中から3曲が演奏された。入場者が少なく、経済的には不成功というしかなく、会場が不適當だったことも指摘された。しかし、作曲者の外国留学の成果を認める批評も現れている。

## 10. 「前半生」の総括

1842年のウィーンからの帰国をもって、フランツ・ベルヴァルトの生涯を前後に分ける区切りとすることには、疑問が出てくるところと思われる。この時点で彼は既に45才9箇月に近く、当時としては長寿だったフランツの人生でも、3分の2近くを経過している。同時代の音楽家の多くにとっては、主要な仕事を大方なしとげた、或いはいよいよ円熟期に入る年齢であり、この年まで健在でなかった人も多い。一方、フランツの側に即して言うならば、彼の代表作とされる4作の交響曲も、2作のオペラも、室内楽の大部分も、まだ書かれていない（『深刻な交響曲 (Sinfonie sérieuse)』だけは、既に完成していた可能性もある）。彼の弟子と呼ばれる若い世代との交流も、ようやく始まるかどうかというところである。

純粹に音楽の面から見れば、フランツはまだ吸収すべく、また身に着けるべき多くのものを残していた。一方、個人としての彼は、もはや生涯の職業として、作曲家以外は有り得ないというところまで、自らを追いやっていた。勿論、彼が作曲家になるという選択をしたのは20年以上前であり、困難にぶつかってもそれを変えたことはない。作曲は、彼が40台半ばを過ぎたこの時点でも、社会的・経済的には彼に多くのものをもたらしていない。しかし、作曲を続けていけることだけは、少なくとも明らかになっていた。整形外科に従事していた時も、音楽から離れる気持ちは些かもなかった。ただ、音楽との両立に苦しんだだけである。1842年以後、フランツは職業として整形外科に携わることはしないが、関係者との繋がりには保ち、時に深く関わることもあった。また、彼はこの後も音楽以外の事柄に深入りし、それを収入源とすることもあるが、作曲活動との両立には、細心の注意を払っている。

ウィーンから帰ってきた時、フランツはまだ評価は高くないが、既に経験を積み、創作意欲

と楽想とに溢れた作曲家であった。彼は、作曲と実生活との間に横たわる難題についても知識を得、それと対決する用意を固めていた。彼の代表作とされる作品は、1842年以後続々と世に出てくる。従って、この時をもって作曲家ベルヴァルトの、本格的な出発の時と見るのは、著しく当を失してはいないであろう。

なお、1842年5月のコンサートの直後、スウェーデン音楽アカデミーでは、フランツを会員に加える為の提案がなされ、簡単に却下されている。彼の知人達の中には、遙かに音楽に対する専門性が乏しいにも関わらず、アカデミー会員になっている者がいることを考えれば、これはフランツに対する評価が低い為ではなく、作曲家、それも自国の作曲家に対する評価が低かった為と見なさざるを得ない。外国出身者は別として、専ら作曲で身を立てる音楽家という存在を、スウェーデンはまだ多く出してはいなかった。フランツが評論家に酷評されたり、論争をしたりすることが滅多になかったのは、作曲に対する批評そのものがまだ確立していなかったことの現れと見るべきであろう。フランツは、この作曲という未発達な領域での先駆者になることをも、この時選んだといえるのである。

次の機会には、経験の深い作曲家及び教育者として、スウェーデンの音楽界に、また広く社会に関わるフランツ・ベルヴァルトについて考察したい。

(本学教授＝歴史学担当)

### <註>

- (1) 彼の名前 Franz は、むしろフランスと表記の方がスウェーデン語の発音に近い。しかしここでは、彼の家庭ではむしろドイツ語が多く使われていたことを考慮し、かつ地名との混同を避ける為、フランツと表記する。
- (2) 長男ヤン・ヘンリク (1781?—1828) は、ストックホルムの学校の語学の教員になった。次男ゲオルク・フリーデリヒ (1783?—1805) は、商店員になったが、女性問題が原因で自殺したと伝えられている。どちらも、異母弟妹の生活には、殆ど関わりを持たなかった。長女のソフィー (生没年不詳) は、継母や異母弟妹と共に暮らし、母アグネッタの死後は、一家の家事の責任を引き受けている。Robert Layton, *Berwald* (översättning av Folke Tornbom). Stockholm 1956. p. 21
- (3) 姉妹の名は、上からアグネッタ・シャルロッタ・ヨハンナ (通称シャルロッタ 1791生)、カロリーナ・グスタヴァ・ヴィルヘルミナ (通称カロリーネ 1794生)、ヘドヴィク・フリーデリカ・ドロテア (通称ヘッダ 1801生) であり、シャルロッタは声楽、カロリーネはヴァイオリン、ヘッダはピアノを、それぞれかなりのレベルまで習得している。Ingvar Andersson, *Franz Berwald*. Stockholm 1970. p.24. Jan Lennart Höglund, *Franz Berwald*. Jönköping 1996. p.9.
- (4) 拙稿「スウェーデン国王グスタフ 3 世の統治と芸術活動」『東京音楽大学研究紀要第23集』(1999) 参照。
- (5) Andersson, op. cit. pp.23—24.
- (6) 拙稿「カールスタッドの軍隊蜂起—1809年スウェーデン革命の軍事的側面」『北欧史研究』第15号 (1998) 参照。



- (7) デュピュイの姓は、文献によっては Dupuy と綴られている例もある。ここでは、スウェーデンで最も普通に使われている綴りによった。
- (8) デュピュイは、デンマーク国王フレゼリク 6 世（在位1808—39）の従弟で王位継承者であるクリスチャン・フレゼリク（後に国王クリスチャン 8 世：在位1839—48）の婚約者で、声楽の弟子でもあるメクレンブルク・シュヴェーリン公女シャルロッテ・フレゼリカと不倫の関係になり、それが発覚してパリに亡命する羽目になった。
- (9) 参考までに、この時期ストックホルムのオペラ座で初演された主なオペラを上げておく。モーツァルト「魔笛」(1812)、同「ドン・ジョヴァンニ」(1813)、同「後宮からの逃走」(1814)、同「フィガロの結婚」(1821)、同「皇帝ティトゥスの慈悲」(1823)、ウェーバー「魔弾の射手」(1823)、ロッシーニ「イタリアのトルコ人」(1824)、同「セヴィリヤの理髪師」(1825)、オーベール「雪」(1825)、ボイエルデュー「白衣の夫人」(1827)、ロッシーニ「タンクレッド」(1829)、ベートーヴェン「フィデリオ」(1832)、オーベール「フラ・ディアボロ」(1833)、同「ポルティエーチの啞娘」(1836)、マイヤーベーア「悪魔ロベール」(1839)。Klas Ralf (red.), *Jubelboken/Operan 200 år*. Lund 1973.
- (10) スウェーデン国王グスタフ 3 世は、オルガン奏者で作曲家であるオールストレーム (Olof Åhlström 1756—1835) に、1788年以後スウェーデン国内での音楽に関する出版一切の独占権を与えていた。他の絶対主義的諸制度と同じく、この独占権も1809年以後多くの批判に晒されていたが、正式に解消されたのは1818年である。なお、独占が終わった後も、オールストレームの発行する『ムシカリスクト・ティスフォルドリヴ (*Musikaliskt tidsfördrif*)』(1789—1835) は、最も影響力のある音楽雑誌であった。Höglund, op. cit. pp.14—18.
- (11) Andersson, op. cit. pp.46—47.
- (12) スウェーデン人の民族意識の高揚を目指す思想及び運動で、特にヨーロッパ大陸の古代末期・中世前期において重要な存在であったゴート族 (goter) と、スウェーデン南部の住人イエート (götar) 人とを混同し、ゴート族と先祖を同じくすることにスウェーデン民族の誇りの源泉を求めようとする立場に立つ。近世から現代に至るまで持続しているが、19世紀前半はその最盛期であった。ゴート族とイエート人の間に何らかの関係がある可能性は、最近の研究によれば殆どない。
- (13) 講談社『現代体育スポーツ体系』(1984) 第2巻88—96頁参照。
- (14) 周知の通り、社会民主党の指導者で首相を勤め、ノーベル平和賞を受賞したヤルマル・ブランティング (Hjalmar Branting : 1860—1925) の父親である。Cf. Nils—Olof Franzén, *Hjalmar Branting och hans tid*. Kristianstad 1985.
- (15) 合奏及び合唱の為のアマチュアの団体で、1820年設立。王太子の側近や貴族官僚を中心に結成されたが、広く市民の音楽愛好家も加え、内外の作曲家の作品の紹介と、ストックホルム市民への音楽の普及に貢献した。1880年音楽協会 (Musikföreningen) に改組。
- (16) Cf. Alma Söderhjelm, C. F. Palmstierna, *Oscar I*. Stockholm 1944.
- (17) ナポレオンの最初の妻ジョセフィーヌと前夫ボーアルネ子爵との間の息子ユージェーヌを父とし、バイエルン国王マクシミリアン 1 世の王女アウグスタ・アマリアを母とする。この縁組は、ベルナドット家が列国の王室の一員として受け入れられ、またナポレオン一族との和解ができたことを示す象徴的なできごととされている。
- (18) フランツは1817年にも、クラリネット、ホルン、ファゴット、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバスの為の七重奏曲を書いているが、これの楽譜は前述の通り現存していない。1828年の七重奏曲は、前作と編成が全く同じであり、恐らく前作を書き直して改良したものと考えられている。Layton, op. cit. p.50.
- (19) Höglund, op. cit. pp.30—31.
- (20) この作品は失われたものと思われていたが、1970年代初め、ストックホルム・オペラ座の古文書の中からスコアが発見されている。中の曲の幾つかは、以前の「セシリア」から使い回されている。

ることも判明している。Höglund, op. cit. p.33.

- (21) このオペラは、従兄で宮廷楽長のヨハン・フレドリクが、フランツに対する嫉妬から故意に無視して、演奏させなかったとする説があるが、もとより大した根拠がある訳ではない。Cf. Adolf Hillman, *Franz Berwald*. Stockholm 1920. p.39.
- (22) 1835年1月、フランツは旧知の駐仏公使レーヴェンヒェルム宛てに、パリでの就学を援助してくれるよう、手紙で懇願している。Höglund, op. cit. p.34.